PHILIPS

プレスインフォメーション

2026 年 10 月 15 日

報道関係各位

フィリップス、グローバル調査レポート「Future Health Index 2026」を発表
AI は「可能性」から「実践」へ―医療現場で具体的な成果が現れ始める

医療従事者の 50%が「AI により、より多くの患者を診療できるようになった」と回答

株式会社フィリップス・ジャパン（本社：東京都港区、 代表取締役社長：安部 美佐子、 以下 フィリップス）は、医療従事者と患者を対象としたグローバル調査レポート「Future Health Index 2026：医療現場で進む AI 活用―いま、医療の未来を形づくる」（以下、FHI 2026）を発表しました。

今年で 11 回目となる Future Health Index の 2026 年度版では、AI（人工知能）の「可能性」からさらに一歩踏み込み、AI が実際の医療現場にもたらしている具体的な影響と、測定可能な成果を調査しています。

本調査は、ブラジル、中国、フランス、ドイツ、インド、インドネシア、オランダ、サウジアラビア、英国、米国の 10 カ国、2,000 人を超える医療従事者と 20,000 人を超える患者を対象に実施したグローバル調査です。

調査からは、AI がワークフローの効率化や医療提供能力の拡大、医療従事者の負担軽減など、すでに具体的な価値を生み始めていることが明らかになりました。一方、医療従事者による AI 活用が急速に進むなか、組織側のインフラやトレーニング、ガバナンスなどの整備がそのスピードに追いついていない実態も浮き彫りになっています。

AI はすでに医療現場で価値を生み出している

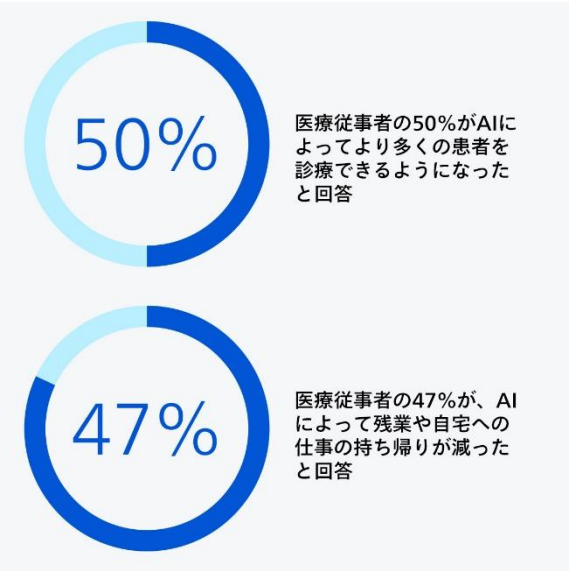
FHI 2026 では、AI が医療従事者の時間を生み出し、臨床上の意思決定を支援するとともに、医療提供能力の拡大や働き方の改善につながっていることが示されました。

医療従事者の 50%が、AI によってより多くの患者を診療できるようになったと回答。その結果、診療できる患者数が増えた医療従事者では、1 週間あたり平均で 8 人多くの患者を診療できるようになったと回答しています。

また、71%がワークフローの効率が改善した、65%が意思決定への確信が向上した、57%が医療チーム間で統合された患者データへのアクセスが改善したと回答しています。

AI の効果は、医療従事者の働き方にも表れています。

- **50%**：AI によってワークライフバランスが改善
- **47%**：残業や自宅への仕事の持ち帰りが減少



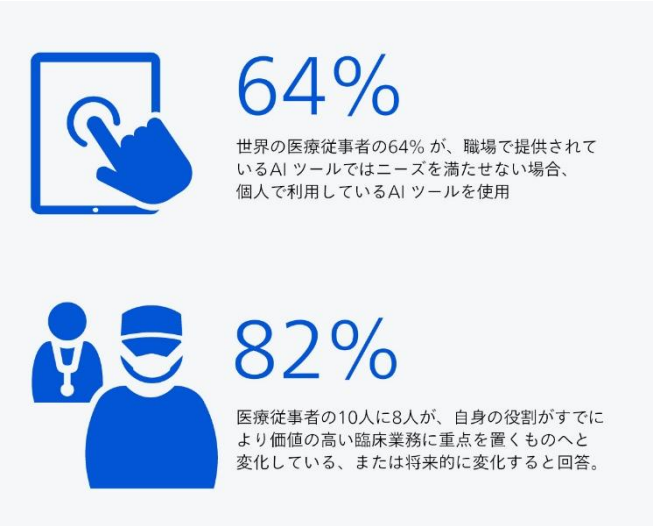
さらに、ヘルスケアリーダーの 62%が、AI への投資によるメリットは「コストに見合う、またはコストを上回っている」と回答しています。

AI 導入のスピードに、医療現場の受け入れ態勢が追いついていない

一方、AI の利用拡大に対して、医療機関の環境整備には課題が残っています。

世界の医療従事者の 64%が、職場で提供されている AI ツールではニーズを満たせない場合、個人で利用している AI ツールを使用すると回答しました。これは、医療従事者の AI 活用へのニーズが急速に高まる一方、組織側による AI 活用環境の整備が、医療従事者による AI 活用の広がりに追いついていない可能性を示しています。

また、医療従事者の 82%が、自身の役割がすでに、または将来的に、より価値の高い臨床業務に重点を置くものへと変化すると回答しています。

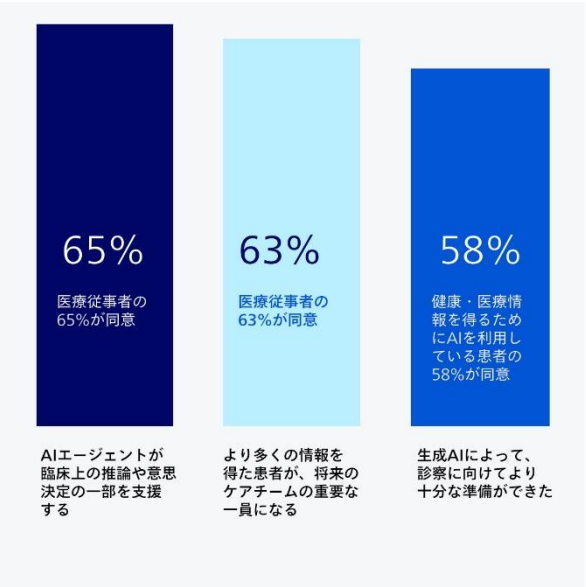


一方、AI を効果的かつ大規模に活用するための体制整備は途上にあります。医療従事者の 70%が、所属組織における AI 搭載ツールのトレーニングについて「利用できない、限定的、または一貫性がない」と回答しています。

AI の価値を医療システム全体へ広げていくためには、単に AI ツールを導入するだけではなく、臨床ワークフローへの統合、役割に応じたトレーニング、明確なガバナンスなど、AI を安全かつ効果的に活用するための環境整備が重要となります。

PHILIPS

AI は「ツール」から、医療従事者を支える「チームメイト」へ



AI の普及は、医療チームそのもののあり方にも変化をもたらし始めています。

将来的には、医療従事者の 65%が、AI エージェントが臨床上の推論や意思決定の一部を支援するようになると考えています。一方、医療従事者は AI により大きな決定権を委ねようとしているわけではありません。多くの臨床上の意思決定において、AI が独立して判断・行動することを受け入れられる医療従事者は 10%未満にとどまっています。

こうした結果から、AI は人の専門性に取って代わるのではなく、医療従事者の判断や専門性を支える「チームメイト」へと、その役割を変えつつあることがうかがえます。

同時に、AI は患者の医療への関わり方も変えつつあります。医療従事者の 63%は、AI によってより多くの情報を得た患者が、将来的にケアチームの一員になると考えています。また、患者の 58%が AI によって患者が診察に向けてより準備できるようになると考えています。

このように、AI が医療従事者を支援するとともに、患者がより多くの情報を得て自身の医療に関わるようになることで、医療従事者、AI、患者がそれぞれの役割を担う、新たな「ハイブリッド・ケアチーム」のあり方が見え始めています。

AI の価値をさらに広げる鍵は、「人」と「AI」の連携

FHI 2026 では、AI が医療現場で具体的な成果を生み始めている一方、その価値をさらに拡大するには、AI と人間それぞれの強みを生かすことが重要であることも示されています。

医療従事者の 90%が、AI 技術が進歩しても人が関与し続けることが不可欠と回答し、86%が AI によるすべての出力には人による監督が必要だと考えています。

AI の価値をさらに広げるためには、AI をワークフロー、データ、医療チームに責任ある形で統合し、医療従事者がより価値の高い業務に集中できる環境を整えていくことが重要です。

※　本 AI 技術は、自動的に装置の性能・精度を変化させるものではありません。

「Future Health Index 2026」について

Future Health Index は、フィリップスの委託により実施されているグローバル調査です。
今年で 11 回目となる Future Health Index の 2026 年度版では、AI が医療にもたらしている具体的な影響と、そこから得られている測定可能な成果について調査しました。
ブラジル、中国、フランス、ドイツ、インド、インドネシア、オランダ、サウジアラビア、英国、米国の 10 カ国における、2,000 人を超える医療従事者と 20,000 人を超える患者を対象としたグローバル定量調査に基づいています。

「Future Health Index 2026」グローバルレポート全文はこちら

https://www.philips.co.jp/a-w/about/news/future-health-index/reports/2026/ai-in-practice.html
上記ページの「レポートをダウンロード」からご覧いただけます。

PHILIPS

フィリップス・ジャパンについて

株式会社フィリップス・ジャパンは、ロイヤルフィリップスの日本法人として 1953 年に創業以来、革新的な技術を通じ、人々のより良い健康と満ち足りた生活の実現を目指しています。主な事業領域は、画像診断、超音波診断、イメージガイド下治療、生体情報モニタ、ヘルスインフォマティクス、睡眠・呼吸治療、およびパーソナルヘルスと多岐に渡ります。ヘルステクノロジーのリーディングカンパニーとして、超高齢化が進む日本の医療・健康課題解決に向け取り組んでいます。
日本の従業員数は約 2,000 人、約 70 拠点でビジネスを展開しています。（https://www.philips.co.jp）

ロイヤルフィリップスについて

ロイヤルフィリップス（NYSE:PHG, AEX:PHI）は、革新的な技術を通じ、人々のより良い健康と満ち足りた生活の実現を目指す、ヘルステクノロジーのリーディングカンパニーです。
フィリップスの革新的技術は人々を中心に設計されています。先進的技術と医療従事者および消費者のインサイトを活用し、消費者にはパーソナルヘルスソリューションを、医療従事者とその患者様には病院や家庭でのプロフェッショナルヘルスソリューションを提供しています。
オランダに本社を置く当社は、画像診断、超音波診断、イメージガイド下治療、生体情報モニタ、ヘルスインフォマティクス、およびパーソナルヘルスの分野で世界をリードしています。フィリップスの 2025 年の売上高は 180 億ユーロ、全世界で約 64,300 人の従業員を擁し、世界 100 か国以上でビジネスを展開しています。フィリップスに関するニュースはこちらからご覧ください。
（http://www.philips.com/newscenter/）